

1957年のニューヨークは、高度経済成長期に入る前の日本から訪れた者にとって、正に驚ろきの連続であった。フィラデルフィアから北東にのびる高速道路を走っていくと、ちょうど夕方になった薄暗い空に、満鑑飾のマンハッタンの灯が、あたかも山のように迫ってくるのであった。必ずしも新しいものばかりではないニューヨークのマンハッタンではあったが、石と煉瓦と鉄とコンクリートで固めたその都市景観は、ひ弱な感じの強い日本の都市を見慣れた目には、きわめてどっしりとしたものとして映った。アメリカの地方都市と比べれば、人々の態度はぎすぎすとし、親切心にも欠けているようであったが、それでも豊かさの象徴としてのニューヨークの存在は、しっかりと脳裏に刻みこまれた。

1972年夏。クリスマスのころと違って夏の蒸し暑い日であった。15年前と比べると、超高層ビル数は大いに増えている。だが、未だに完成したものとしては、1931年にできたエンパイアステートビルが最高であった。南部に110階の世界貿易センタービルが完工間近かの数を突出させてはいたが、15年間に、ニューヨークは景観的に大きな質的な変化をとげたとは思われなかった。もちろん、よく見ると、地味ではあるが非常に立派なガラス張りの数十階の超近代建築が林立しており、東京とは比較にならないほど高層化が定着していることも事実であるが。

昼間のタイムズスクエア。それは、昔のあまりきれいでない姿を未だに保持していた。夕方になると、人通りははるかに増える。それにもましてものすごいのは、真夜中である。ラッシュアワーを思わせるほどの人出で、しかも黒人が半分あるいは半分以上を占めている。黒人たちは、白人以上に派手な服装をし、表情が豊かで、そして大手を振って歩いている。

ニューヨークの五番街。アメリカン、あるいは世界一の高級商店街である。アフリカンルックのニューファッションをした黒人女性と、どうしてあかもすらっとしているのかと思えるほどのすらっとした一分のすきもない黒人紳士が歩いている。道ゆく人はちらちらと振り返って見る。

そういえば、アメリカの街の生活で最も大きな変化は、黒人の台頭のようなものである。ワシントンでもニューオーリンズでも、一流ホテルにおびたゞしい数の黒人が泊っていた。アメリカは急速に変りつつあるのだ。

京 都

内 藤 博 夫

10月下旬、5年ぶりで京都を訪れた。それまでに3回京都を訪れる機会があったが、そのうち

の2回は中学・高校の修学旅行であり、記憶はすでに薄れかけている。今回は多少くわしく見て回ることにした。

市内を歩いてみて神経が疲れることに気がついた。初めは身体の調子の影響かとも思ったが、どうやら市街地景観のためのようだった。京都では目抜き通りにも瓦葺きの木造家屋が堂々と店をかまえている。東京などではあまり見られない光景である。ビルが建ち雑踏の程度も東京並みの京都の商店街に、依然として伝統的な木造建築が存在していることは、1種の驚きであった。こうした和洋混在状態を調和的とみるか不調和なものとするかは意見の分かれるところであろう。京都になじむ機会が少なかった私などは、なれるまで時間がかかったのであるが、京都市民にとってはあるがままの京都が自然な姿と映るにちがいない。日本人の心のふるさとともいべき京都の市街地から、機能上の理由で伝統的建築物が将来撤去されるとしたらやはりさびしいことだと思う。

泊った旅館は鴨川の支流白川のほとり、祇園の料亭街の中にあった。周囲には京情緒に富んだ木造建築が多く、100年以上経過した建物が多いという。そのためこの白川沿いの地域は今年になって特別保存地区に指定されたそうである。

祇園の料亭を市民はお茶屋さんという。この茶屋の規模は外見とはだいぶ違うようだ。間口が7～8mでも、奥行きが80～90mもあるものがある。しかも建物と建物とは密接していて敷地一杯に建てられている。料亭街にも一般の住宅が存在するが、住民は道路に対してたて長の長屋に住んでいて、大変な過密状態である。もっとも茶屋の中には中庭をもっているものもあるが。こうした地区で火災が発生したらどうなるのだろうか。手のほどこしようがないのではあるまいか。旅館のおかみもそのように言っていた。防火上、都市再開発によってこの過密状態を是正できないものかとも考えてみた。だが、歴史的景観地区を再開発することはきわめて困難である。この過密は歴史の蓄積の結果であるからだ。つまり過密現象自体が歴史的景観の自己表現なのである。しかも一般的にいて都市計画に再開発を盛込むことは住民の抵抗などがあって種々の困難を伴うために、都市計画は今後起りうべき事態に関する規制を定めることで終りがちである。結局、個人個人の自覚で防火につとめる以外に当面は方法がないようである。

旅館の窓からは東山の峯々がよく見えた。その麓には知恩院の山門と本堂があった。その日は清水寺を訪ねてみた。そこでは寺と背後の山の稜線と樹林とが見事な調和の世界を作っていた。清水の舞台は周囲の自然との調和をはかるためにわざわざ作られたものではなからうかとさえ思われた。よく知られているように京都は盆地にある。盆地を囲む山々は京都の風情を構成する不可欠の要素である。

昔の人もこのことをよく承知していたのであろう。市街地のはずれの山麓にある寺院では、地形

と樹林とが景観の要素としてたくみにとりいれられている。こうして自然との融合をはかってきた昔の人の心の豊かさに、あらためて感服させられた。私たちの心をも豊かにしてくれるこうした文化遺産の保存には、十分な対策が施されなければならないと思った。

指 輪 の 話

貝 山 久 子

私の手は女にしてはずい分大きい。てのひらが大きい上に指が長いので、手袋を買う時いつも苦労する。その指も太くてゴツゴツしていて白魚には程遠く、せいぜいわかさぎ位である。昔読んだ小説に、ある地方では手の大きい女は働き者であるが同時に生れが賤しいとされているので、主人公の娘が自分の大きな手を羞じて、人前に出るときいつもかくしている、というのがあった。私は別に手の大きなのを羞かしいと思ったことはないが、宝石で飾るにはふさわしくない手だというのが、少女のころからかなり長い間心を支配していた。それで結婚してからも所謂カマボコ指輪しか用いなかったが、ある時アフリカからのお土産にトパーズを頂いたので大決心の末指輪に加工して貰った。その細工が大変気に入ったのと、指輪が似合うとほめられたのに気をよくして愛用している中に、変化を求めて更にいくつかを手に入れ、かわるがわる使っていた。しかし数年前にブラッドストーンの指輪を買ってからは、ほとんど一辺倒になってしまって、濃緑に朱色の小斑のあるこの半貴石の指輪を手離すことができない。それは石が気に入っていることの他に、誕生石であるからかもしれない。

花に花言葉があるように宝石には石言葉があり、また宝石にまつわる伝統も多いことから特殊な宝石を12ヶ月にわりあてたのが誕生石で、その起源は1世紀にさかのぼると云われている。しかし実際に使用されたのは18世紀頃からのようで、ところによって多少の相違があった。そこで、1912年カンサスシティで開かれた宝石組合の大会の席上、その統一が申しあわされたという。この決定に基づいた久米氏の説と、地学教育辞典の柴田氏の説を掲げるが、6月以外は概ね共通している。

久 米 氏

柴 田 氏

1月 柘榴石

ざくろ石

2月 紫水晶

紫水晶